

令和6年10月26日(土)〜12月1日(日) 9時〜17時入館は16時30分まで 荒川ふるさと文化館1階 企画展示室

鑄造のまち 日暮里

—銅像の近代—

令和6年度 荒川区立荒川ふるさと文化館 企画展



荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL03(3807)9234
登録(06)0053号

図 日暮里の鑄造家たちが手がけた和氣清麻呂像完成写真（個人蔵）

企画展「鑄造のまち日暮里 — 銅像の近代 —」開催

その銅像は日暮里生まれ 仙台の伊達政宗像が日暮里で鑄造されていたことをご存知でしょうか？ 日暮里の職人の手により作られた銅像が、全国各地に運ばれ、設置されていた時代がありました。

かつて西日暮里五丁目・同六丁目には、多くの鑄物工場があり、鑄造職人が有名な彫刻家の作品を銅像に仕上げていました。この技術は今日に引き継がれ、現在は伝統工芸技術の職人として活躍しています。

写真に鎮座す君の名は さて当館では、今秋、「鑄造のまち日暮里 — 銅像の近代 —」と題した企画展を開催します。展示をより上げるためには、日暮里で造られた銅像に関して様々な視点から情報を把握することが必要です。この課題に二つの方向からアプローチしました。

一つ目は、現在も続く職人が所蔵する古写真から作品を探す方法です。もともと見ただけで像主がわかるものだけではないため、そんな時は、Googleレンズ等を駆使し、画像検索で特定していききました。但し求める検索結果は直ぐには出ず、10頁以上先にヒントがあることもあるので根気が必要です。どこにある何という銅像かがわかれば、原作者名や作品名、時期・場所などの情報が入手でき、少しずつですが銅像の全容が見えてきます。

二つ目は、把握した工場名・鑄造職人の名前から作品を探す方法です。昭和3年（一九二九）に発行された『偉人の像』という書籍には、この時までに建てられた全国の銅像が写真とともに掲載されています。この本をはじめ、図書館等の各種データベースで、日暮里の鑄造職人名や工場名をひたすら検索し、探し出していきました。

銅像の行方を追いかけて このような過程を経て、冒頭の伊達政宗像をはじめ、皇居大手濠緑地の和氣清麻呂像（図）や、国会議事堂中央広間の板垣退助像・伊藤博文像、青森の津軽為信像、大分の太友宗麟像など、全国津々浦々、150点近くの作品が、日暮里出身であることがわかってきました。しかし、これはあくまでスタート地点にすぎません。戦争のため供出されて現存しない、一部だけになってしまった、台座だけが残る、台座はあっても別の像が建っている、同じ像が戦後再建された等々。現存の有無や現状、関連資料の調査などの作業が続きます。その成果を実物・古写真などから紹介します。皆様のご来館をお待ちしております。

〈高柳吟音〉

あらかわ
タイムトンネルズ35

日ぐらしの里の遠眼鏡



図 「日ぐらしの里名所ひとり案内」(東京大学総合図書館蔵)

今年の古文書講座初級編では、江戸名所、日ぐらしの里に関する史料を読んだ。その一つが「日ぐらしの里名所ひとり案内」だ(図)。既に、川添登『東京の原風景』(N

HKブックス、一九七九年)で紹介されている刷物で、成立は、一七八〇年代とされる。花見寺の一つ青雲寺が庭を整備したのは安永年間(一七七二〜七九)なので(『新編江戸志』)、それから間もない時期に当たる。版元の「日ぐらしの里平兵衛」が何者かは不明だが、彼がアピールしたかった日ぐらしの里の名所の要素が窺える史料である。

全ては紹介できないので、講座参加者の興味を引いてやまなかつた話題を一つ紹介しよう。

諏訪台の遠眼鏡 諏訪台(図の左上)には、「かわらけなげ」(「どうめかねミせる」とある。遠眼鏡とは望遠鏡のこと、その遠眼鏡で見る風景は、「此地よりむかふ、とうめかねにて、ミはらしたくないめうけい、いわんかたなし」とされている(意訳…ここから向こうを遠眼鏡で見晴らせば、他に比べるものがないほどの美しい風景が広がっている)。

絵を見ると、遠眼鏡の形状が窺え、台の上に置かれた遠眼鏡は結構長い。遠眼鏡を覗く男は、遙か遠くの筑波山の方を向いているものの、東側(図の上辺)には、遠景として隅田川や日光山も描かれており、これらも眺望の対象だったと考えられる。とすると、西側(図の下辺)に描かれた箱根山・大山・不二山(富士山)・秩父山も日ぐらしの里から望む遠景といえる。東西どちらにも開けた眺めが、日ぐ

らしの里の魅力の一つだった。

舟繫松の遠眼鏡 舟繫松(図の中央左)は、諏訪台などよりまた一段高く、眺めは絵の如し、とされた(「江戸名所図会」)。

ここにも遠眼鏡があり、大和郡山藩下屋敷(六義園)の隠居大名柳沢信鴻は、しばしば日記に書き留めている。信鴻は遠眼鏡を見せていた老人と言葉を交わしているが、老人がいうには、自分は長崎の眼鏡師であり、楊弓師でもあり、遠眼鏡は幕府の許可を得て人びとに見せているとのことだった(「松鶴日記」天明8年5月4日条)。

さて、遠眼鏡から見えたものに関する記述もある。

○船繫松まで登ったところ、北西に黒雲が見え、一面雲が満ちていた。遠眼鏡を見ている者が帰ろうとしているので聞いてみると、日光は大雨に見えたが、こっちは雨は来ないようだと言われた(「宴遊日記」安永9年4月8日条)。

○舟繫松の下で遠眼鏡を見た。七里くらい向こうの金子町の幟や国府台などを見る。数百mを隔てた田圃の馬、あるいは歩く人の衣服や目鼻もよく見えた(「松鶴日記」天明8年5月4日条)。

日光の天気やあぜ道を歩く人の顔まで見えたという遠眼鏡。信鴻らの目がよかったのか、遠眼鏡の性能がよかったのか、今となっては何ともいえない。

〈亀川泰照〉



図1 『竿忠の寝言』

和竿職人・竿忠 「竿忠」、釣りが好きであれば一度は手にしてみたい憧れの竿である。この竿を生み出す職人が区内に住んでいる。荒川区指定無形文化財保持者、五世四代目竿忠こと中根喜三郎氏。黄綬褒章を受章、東京都名誉都民、荒川区民栄誉賞等を受賞した和竿名人である。中根氏が継承してきた「竿忠」の歴史と技にスポットを当てた館蔵資料展をこの夏（8月3日～9月1日）に当館で開催した。ここでは、展示資料の一部から竿忠の歴史を紐解いてみたい。

五世四代目竿忠 中根氏は、昭和6年（一九三二）8月、東京市本所区堅町（現墨田区）生まれ。戦災で両親・兄ら家族を亡くし、中根氏と妹の海老名香葉子氏だけが生き残ったことは、香葉子氏の自伝的エッセー『後ろの正面だあれ』等により知られるところである。竿忠の技は一子相伝で、長兄が継ぐはずだったが、父（三代目竿忠）の友人だった三代目三遊亭金馬の勧めで竿忠の再興を決意。昭和47年四代目竿忠を襲名した。

竿忠の歴史 そもそも一子相伝を謳う竿忠とはいかなる職人の家なのだろうか。初世は中根音吉（天保8年（一八三七）～明治31年（一八九八））。初代泰地屋東作に師事、独立し「釣音」を名乗った。その長男が二世の忠吉（元治元年（一八六四）～昭和5年（一九三〇））である。竿忠を名乗り、竿師の明治三名人の一人として名をはせ、刀の鞘師から刀鞘漆工法を学び、松皮塗り、錆竹塗、煤竹塗などの新技法を考案した。



図2 再建された名人竿忠之碑

職人 ことばれ話 ① 竿忠の歴史と技を誌すこと刻むこと

『竿忠の寝言』と名人竿忠の碑 初代没後の昭和6年、孫の音吉（三代目竿忠、喜三郎氏の父）

パリ万博と竿忠 初代竿忠は和竿を工芸品に高めた人物という評価がある。それには次のようなエピソードがある。洋行帰りの農商務省の役人が西欧の鋼鉄製の釣竿を褒め称え、和竿を工芸品ではなく玩具だと発言したことを竿忠が耳にした。怒った竿忠は居並ぶ役人を睨みつけ、「竹の竿に漆工を加味すれば、茲に立派な工芸品である」に始まる大演説を行った。職人が生み出す和竿の技の神髄を滔々と語り、和竿は美術工芸品であると言明するよう役人に迫り論破した。これをもって和竿の優秀品は工芸品に編入されたようだ。

明治33年のパリ万国博覧会の際、明治政府から依頼があつて独特の漆工法を施した竿を出展した。竿は完売、賞状と銀杯を受領したという。その後、開催された国内外の博覧会でも美術工芸品として高い評価を受けたのである（『竿忠の寝言』）。

が文豪徳富蘇峰に揮毫を依頼し「名人竿忠之碑」を木場（江東区）の洲崎神社に建立、伝記『竿忠の寝言』（図1）を出版した。同13年には彫刻家の朝倉文夫が肖像彫刻を完成させた。この頃、名人竿忠に対する顕彰が立て続けに行われたのである。これらが実現したのは文化人を中心とした釣の愛好者の支援は勿論のこと、何よりも竿忠の歴史と技を継承したいという三代目の強い思いがあつたからに他ならない。



図3 江戸和竿匠の技の歴史めぐり碑

江戸和竿匠の技の歴史めぐり碑 昭和49年、中根氏は、戦火に罹った「名人竿忠之碑」の再建を行った（図2）。そして、令和3年には香葉子氏とともに江東区亀戸の光明寺境内に「江戸和竿匠の技の歴史めぐり碑」を建立した（図3）。そこには「実用品から美術工芸品にまで高く高めたその匠の技を継承してきた竿忠累世の和竿づくりの伝統的手工芸の歴史を後世に伝え残すことを念じ、さらに私は五世四代目を以って中根家一子相伝の竿忠を惜しまれつつも閉じる事を決意」したと建立に至った思いが刻まれている。中根氏も父と同様に江戸から続く竿師の家の技と歴史を永遠に伝えることを使命として、異なるに違いない。

中根氏は、93歳になつた今でも、工房で竹と向き合っている。（野尻かおる）

あらかわの記念碑

其の4 尾久の日露戦争記念碑

明治37年～同38年（一九〇四～〇五）の日露戦争の後、全国各地で膨大な数の記念碑が建てられました。尾久には二つの日露戦争に関する記念碑が存在します。

「日露戦役招魂碑」 まず、地藏山墓地（西尾久二丁目）にある「日露戦役招魂碑」（図1）。もとは墓域の外、都電通りに向かって建てていました。日露戦争での尾久村出身の戦死者たちの鎮魂を祈る慰霊碑です。高さ2.3m。隷書を得意とした東京の書家中根半湖による揮毫です。明治39年4月に建てられました。裏面には尾久村から出征して戦死した3名の名前に、所属部隊、階級、没年月日、戦死地なども詳細に刻まれています。尾久村在籍戦友中と尾久村兵員慰労義会が建碑の発起人となりました。

「明治三十七八年戦役凱旋記念碑」 もう一



図1 日露戦役招魂碑（寶蔵院蔵）

つは、八幡神社（西尾久三丁目）にある「明治三十七八年戦役凱旋記念碑」（図2）。日露戦争凱旋を記念する碑です。高さは3.3mもあります。同戦争で陸軍の満州軍総司令官だった大山巖の揮毫で、同39年11月に「明治三十七八年戦役凱旋記念碑」の建設願が東京府へ提出され、翌12月には建碑が実現しています。出征の際に八幡神社で戦勝祈願が行われたのでしょうか。その「報賽」（祈願成就のお礼）として、地元在郷軍人や有志者から寄付金を集めて建てられました。裏面には出征して無事に帰国を果たした尾久村出身の「凱旋軍人」50名が列記され、顕彰されています。あわせて寄付に賛同した「建碑有志者」として、発起人の石井良之助や尾久村長の三橋周之助をはじめとする尾久村会議員などの地域の有力者のほか、凱旋軍人の中にも自ら寄付して有志者に名を連ねる者もいました。

同じ尾久にある二つの記念碑は、同じ日露戦争関係であっても、「慰霊」と「報賽」、それぞれ別の目的で建てられたということなのでしょう。



図2 明治三十七八年戦役凱旋記念碑（八幡神社蔵）

実は名工の作例 ところで、両碑には共通点があります。「井亀泉」という銘が刻まれているのです（図3・4）。明治・大正時代に活躍した駒込の石工・二代目酒井八右衛門のことです。

同じ日露戦争関係では飛鳥山（北区）の記念碑も井亀泉作。荒川区内を見ると円通寺（南千住一丁目）の天野君八郎碑・三幸翁之碑・仏磨大和尚之墓・樵村丸毛君碑・円通当堂寺再建碑（彰義隊関係追弔碑群〈区登録有形文化財〉の内）、諏方神社（西日暮里三丁目）の社号標といった作例があります。

今回紹介した両碑は日露戦争の記念碑としてだけでなく、名工・井亀泉の作例としても注目です。

《澤田善明》



図3（左）日露戦役招魂碑の左側面

図4（右）明治三十七八年戦役凱旋記念碑の裏面

計報

●荒川区指定無形文化財保持者（工芸技術・铸造）菓子満氏は去る令和6年6月20日に逝去されました（享年87歳）。
謹んでご冥福をお祈りいたします。